Zhongguo Sheng Violin recital

不屈の魂 今を生きる伝説

シエン・ジョングオ（盛中国）ヴァイオリン・リサイタル

ピアノ：瀬田裕子 Piano：Hiroko Seta

Program

ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ「F.A.E.のソナタ」より スケルツォ
シューベルト：アヴェ・マリア
ポンセ：小さな星
ドビュッシー：ベルガマスク組曲より「月の光」
クライスラー：美しきロスマリン op.55-4
秦咏誠：海浜音詩
沙漠昆：牧歌
張靖平：豊作の祝い
ヴィエニャフスキ：華麗なるポロネーズ第1番 ニ長調 op.4
焦鉄軍&栗林琢也／盛中国 編：さくら幻夜
ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ 第3番 ニ短調 op.108

2014年11月15日（土）

開演14:00（開場13:30）

浜離宮朝日ホール

※事情により、曲目・出演者が変更になる場合がございます。あらかじめご了承ください。

全席自由／¥5,000（税込）

◆チケット発売

朝日ホール・チケットセンター	03-3267-9990
カンフェティチケットセンター	0120-240-540
CNプレイガイド	0570-08-9990

主催：音楽で日中を繋ぐ会　後援：中国大使館文化部　マネジメント／お問合せ：マルタミュージックサービス　047-335-2002　http://maltamusic.net/

不屈の魂　今を生きる伝説

シェン・ジョングオ（盛中国）ヴァイオリン・リサイタル

「試練というものはたくさんあればあるほど良いと思います。」
「舞台に立って音楽で表現するものは、私個人の感情ではない。
私が表現したいものは、時代、人類、もっと大きなものです。」

～盛中国氏インタビューより～

盛　中国　　シェン・ジョングオ

Zhongguo Sheng

中国を代表するヴァイオリニストとして、年間100回以上のステージに立つ盛中国は、1941年、四川省重慶市で音楽一家の長男として生まれた。父はヴァイオリン教授、母はソプラノ歌手で、11人兄弟のうち実に9人がのちにヴァイオリニストとなる。幼少より父の厳格な指導を受け、7歳で初ステージに立ち、9歳のときにはモーツァルトの協奏曲など1時間に及ぶプログラムが全国に放送されて、大きな反響を呼ぶ。1954年、中央音楽学院付属中学校に入学。60年には国家派遣留学生に選ばれモスクワ音楽院に入学して、レオニード・コーガンに師事する。62年チャイコフスキー国際音楽コンクールで栄誉賞を受賞。64年に卒業、帰国。65年には中国中央楽団（現・中国国家交響楽団）所属の独奏ヴァイオリニストとなり、現在もその地位にある。

苦難にあった文化大革命時代を乗り越え、1979年にメニューインが訪中した際には、中国を代表するヴァイオリニストとして、バッハの＜２台のヴァイオリンのための協奏曲＞を共演。80年からは中国の改革開放政策のもと、再び国際舞台において活躍を始める。特にオーストラリア公演では、シドニー・オペラハウスにおいてコンチェルト、ソロを五夜連続で公演して絶賛を博した。86年、第3回日本国際音楽コンクールの審査員として初来日。コンクール後、日本の若手ピアニスト瀬田裕子とデュオを組み各地で演奏、以来日中両国で共演の回数を重ねてその人気を高めていく。91年、第１回馬思聡国際ヴァイオリン・コンクールの審査員として渡米。95年、キングレコードからCD『梁祝／牧歌～盛中国／大地の旋律～』を発売、各方面より高い評価を得る。中国でのレコーディング数と総売上げもクラシック演奏家としては異例の多さで、90年には中国レコード総公司よりレコード賞“金賞”を贈られた。

2001年からは、公私ともに最良のパートナーである瀬田裕子と東京・紀尾井ホールでデュオ・リサイタルを行っており、その卓越したテクニックと人間味溢れる音楽は、多くのファンを魅了している。2008年の北京のオリンピックに際しては、「盛中国・瀬田裕子 芸術の旅」コンサート・シリーズが、同オリンピック組織委員会の正式イベントに認定された。中国ヴァイオリン学会会長。中国音楽家協会理事。中国社会経済文化交流会理事。2008年まで全国政治協商委員を4期に渡って務めた。2000年、日本外務大臣表彰。

瀬田裕子　　せたひろこ

Hiroko Seta

幼少時から音楽に才能を示し、5歳より正式なピアノ教育を受ける。1974年には東京交響楽団とモーツァルトの《2台のピアノのための協奏曲》を演奏した。石川文子、柳川守、故・森安耀子、ピーター・フォイヒトベンガーの諸氏に師事。

83年、国立音楽大学器楽科ピアノ専攻を卒業。86年、欧州諸国を巡り研鑽を積む。帰国後、第3回日本国際音楽コンクールの審査員として来日していたヴァイオリニスト盛中国と出会い、その伴奏を務めて好評を博した。これがきっかけとなって、中国各地から招聘を受け、北京、上海、広州などの中国各都市においてデュオ・リサイタルを開催、絶賛される。以来、中国と日本の双方に活動の本拠をおき、日中をつなぐ懸け橋として両国で活躍。その演奏や録音の数々は、両国の評論家や聴衆から高い評価を得ており、とりわけ公私にわたるパートナーとなったヴァイオリニスト盛中国とのデュオは、聴衆から「黄金のコンビ」と高く評価されている。

またソロ活動も活発に行っており、北京交響楽団、中国国立バレエ団交響楽団、上海交響楽団など、中国国内の主要オーケストラとモーツァルトの《ピアノ協奏曲》などを度々共演しているほか、97年には現代中国を代表するピアノ協奏曲《黄河》を外国人として初めて中国各地で演奏。北京では1800席の客席を満員にして、中国国内はもとより、日本でも大きく報道された。2005年秋からは、東京で毎年ソロ・リサイタルを開催。2007年のオール・ショパン・プログラムでは、「フレーズとフレーズとの巧みな間合い、ハーモニーが醸し出す陰影に富んだグラデーションなどを活かした、濃密なショパンを味わわせてくれた」（「音楽の友」、百瀬喬氏）と絶賛された。録音は、盛中国の数多いCDで伴奏を務めているほか、ソロCDが中国音楽家音像出版社、ALMレコードからリリースされている。

2000年、日中文化交流への貢献が認められ、日本外務大臣表彰を受けた。現在、湖北省シャンファン音楽学院客員教授、雲南芸術学院音楽学院客員教授。